

課 題	新規 別 継続	継続	経常・特別別	経常	当 年	開 発 箇 所	期 間	昭 和 60 年度 — 昭 和 62 年度	予 算 科 目	技 術 開 発	経 費	品 名	数 量	単 価	金 額	
			目標との関連								2-1-1				円	千円
						造林課					物件費	調査用品				
											役務費	現像、その他				
											人件費	(基 礎 職 時	( )		( )	
											計	—			( )	
<p>目的 薬剤による地拵、下刈、つる切作業における投資効果を比較しながら 除草効果による薬剤の使用量及び作業内容の究明をはかる。</p>																
全 体 計 画		実 施 経 過		当 年 度 分												
				実 施 計 画		実 施 結 果		評 価 お よ び 普 及 計 画								
<p>1. 試験地設定 (1) 薬剤散布区設定 (2) 無散布区設定</p> <p>2. 植生別の薬剤効果 追跡調査</p> <p>3. 調査事項 (1) 植生推移調査 (2) 造林木生長量調査</p>		<p>1. 試験地設定 (昭和60年度)</p> <p>(1) 場所 国見平国有林 8 ㍴ 林小班</p> <p>(2) 面積 0.72 ha (0.12 ha x 6箇所)</p> <p>2. 調査事項 (昭和60.61年度)</p> <p>(1) 散布量による効果の比較 (2) 散布時期による効果の比較 (3) 人力2回刈との比較 (4) クスの追跡調査</p> <p>3. 調査内容 6箇所の試験地内のクス を10本選定し、散布後及び 刈払後の状況を追跡調査</p>		<p>1. 調査項目別に追跡調査</p> <p>2. 下刈(人力全刈)を実施後、再 発生(クス)に対し、サイトロンに よる併行つる切を実施する</p> <p>3. 調査結果のとりまとめ</p>		<p>1. 調査項目別に追跡調査 を実施した。</p> <p>2. 下刈(人力全刈)を実施後 クス発生及び新葉の展布 状況を見極めながら、サイ トロンによる併行つる枯殺を 実施した。</p> <p>3. 調査結果のまとめ。 (1) 前年実施した林地除草 剤(サイトロン微粒剤)の使 用によってクスの大半は制圧 できた。 (2) 内之浦地方では、林地除 草剤による下刈作業の適期 は6月中旬から下旬が最も良い。 (3) 併行つる枯殺は、下刈実行 後約2ヶ月経過後が良い。</p>										

# 試験経過記録

区分 任意

内之浦 営林署

(様式4) ~ 2

## 1. 次年度への薬効調査 昭和61年6月9日実施

昭和61年度サイトロン散布により生存株に調査したクス株からの発芽および、新芽の伸び方について調査。

50kg散布区	5月10日実施箇所	生存率 20%	→	生存株からは発芽し、新芽は普通に伸びていた。(調査対象株 2本)
"	6月10日 "	" 50%	→	" ( " 5本)
100kg散布区	5月10日 実施箇所	生存率 10%	→	調査対象株からは発芽はなく、完全に枯損の木態に陥っていた。(調査対象株 1本)
"	6月10日 "	" 80%	→	調査対象株からは、4本の発芽は発生して下枝、新芽の伸びは悪く 20cm ~ 30cm 程度しかなく、今後伸びる勢いは感じられない。(調査対象株 2本)

※ 以上の調査結果から 50kg 散布区の生存株にはサイトロンの次年度の薬効は、鮮明には現れなかったが、100kg区の場合は、はたりに薬効が見受けられる。この結果、散布量については、100kg/HA 位が必要であることがわかった。

## 2. 併行つる切作業の散布適期

下刈(全刈)入刈2回目実行後、併行つる切作業を、どの時点で実施するかを決定するため、クスを中心とする雑木の繁茂状態を観察した。

下刈実施期間	昭和61年6月9日から昭和61年6月19日まで	面積 9.08HA	請負実行 延人員 65人	工期 7.2/HA
つる切(併行)実施期間	昭和61年8月20日から昭和61年9月2日まで	面積 9.08HA	請負実行 延人員 52人	工期 3.9/HA 散布量 72kg/HA

※ 下刈実行後 2ヶ月以上の経過を経てサイトロン散布を実行した理由。

1. 前年度の実行が早い時期であったため、時期をおくれた場合の効果を見られたため。
2. クスおよび雑木の下刈後の繁茂を最大限にして実行することにより効果を高める目的があったため。

この結果、クスの生存株は調査区内では0であった。また、タネ、タネ、幼木の照葉樹を除く雑草木に対する効果も非常にはたりに現れた。また、カヤに対する薬効は全く見受けられなかった。

状 況 写 真

区 分 任 意

内 云 浦 営 林 署

( 様 式 6 )

No. 5



人力下刈(全刈)実行後、再生した試験地全景。  
写真中央に再生の欠けが見受けられる。  
No. 5

No. 7



散布後約1週間経過後の試験地全景。  
欠け中心にサイロンの薬効が鮮明に現れている。



併行7名切作業実施状況。サイロン微粒剤の  
人力散布状況。

# 状 況 写 真

区分 注意

内三浦 営林署

(様式6)

10.1



次年度薬効調査状況  
発芽はしているが、非常に弱々しく、薬効は充分認められず

10.3



併行7月実施計画において  
人力下刈実施前の試験地全景  
10.4



散布前、最繁茂地矣、此に設定したため、薬効対り目以上  
消滅している。



人力下刈(全刈)実施後 試験地全景

技術開発課題完了報告書

課題名	林地除草剤の抑制効果について (サイトロン)					
課題区分	任意	開発期間	昭和60年4月 ～ 63年3月	担当	内之浦営林署	
目標	薬剤による地拵、下刈、つる切作業における投資効果を比較しながら、除草効果による薬剤の使用量及び作業内容の究明をはかる。					
結果	1. 林地除草剤(サイトロン)の使用量による薬効 ha当り50kg散布区の薬効は鮮明には現われないが100kg散布区の場合にははっきりと薬効が見受けられる。この結果散布量については1ha当り100kg程度が必要となる。 2. 林地除草剤による下刈作業の適期 大隅地方においては、林地除草剤による下刈作業の適期は6月中旬から下旬頃が最も良く併行つる切作業は下刈実行後約2ヶ月の経過を経て実施するのが良い。					
施業及び作業の内容	項目	内容	項目	内容	項目	内容
	伐採の方法					
	樹種	スギ				
	林齢	3年				
	胸高直径	cm				
	樹高	m				
	ha当たり本数	3,000本				
材積	m <sup>3</sup>					
開発経過と調査内容	1. 試験地設定 0.12haを単位とする試験地6箇所0.72haを設定 2. 調査項目 (1) 除草剤(サイトロン)散布量による効果の比較 (2) 除草剤(サイトロン)散布時期による効果の比較 (3) 下刈人力2回刈との比較					

(4) 除草剤(サイトロン)散布後の次年度薬効を見るために前年度実施した枯損状況調査で生存としていた株の発芽と新芽の伸び方について調査した。 (5) 併行つる切作業の散布適期をつかむために、下刈実行後クス発生及び新葉展開状況を調査した。
評価及び普及指導 1. 薬剤量50kg使用の場合は、散布技術の熟練を要するので、増量剤の活用を図る。 2. 散布時期が遅くなる程効果がうすい。 3. クス処理を主とする林分では散布時期が早い程効果的である。 4. 下刈作業全体からみた場合、早い時期の散布地では、雑かん木の再発生がみられる。